

エッ男のつぶやき『家族に支えられて』久保田信立せ 女のささやき 『福島を生きる』 佐々木るり報 男女両性で形づくる教団をめざす協議会報 第二回女性住職の集い

寄変わりゆく寺、変われない寺 鈴木量応



変われない変わりゆく寺

岡崎教区 淨教寺 住職

鈴木量応

「私は、いわゆる寺生まれの寺育ちです。四人兄弟の二番目で長男という境遇で育ってきました。 弟の二番目で長男という境遇で育ってきました。 が少期には感じませんでしたが、考えてみたらず 幼少期には感じませんでしたが、考えてみたらず 幼少期には感じませんでしたが、寺には独特の空 気というものがあります。長男というのはやはり 「跡継ぎ」ということで期待をされます。本心かど うかは分かりませんが、男の子が生まれると「こ かは分かりませんが、男の子が生まれると「こ ではありません。私の場合、「跡継ぎ」ということ を一番身近で期待していたのは祖母でした。祖母 は幼い頃から「将来はこの寺を継ぐんだよ」とい うことをはっきりと言われる人でした。祖母にとっ うことをはっきりと言われる人でした。祖母にとっ

のです。

て私は「かわいい孫」というよりも「大切な寺ののです。

は、「これで跡継ぎができたね」という言葉に戸惑れば、ことに気付かされました。「男の子なの、良かったているだけで、周りの人たちの様子などはまったているだけで、周りの人たちの様子などはまったく覚えていません。そもそも見えていなかったのでしょう。ですから息子が誕生したときに、「長男の近生」を少し客観的に見ることができ、多くのことに気付かされました。「男の子なの、良かったのによっているだけで、周りの人たちの様子などはまったことに気付かされました。「男の子なの、良かった。」「これで跡継ぎができたね」という言葉に戸惑ない。



れなことを考えさせられました。 いなごとを考えさせられました。特に驚いたのは、 いなごとなんだろう?「半人前」と言われるのはどう である彼女が「女は半人前」と言われるのはどう である彼女が「女は半人前」と言われるのはどう である彼女が「女は半人前」と言われるのはどう かっことなんだろう?「半人前」として、この女 性はどんな人生を歩んでこられたのだろうかと色 性はどんな人生を歩んでこられな感じだった

はないかと思います。 係がようやく問題視されるようになってきたので 中において、寺と門徒、そして近年、女と男の関 感じて育ってきました。同朋会運動が展開される います。少なくともそういう変化を微風ながらも 当然だと感じている人たちが同世代の中には多く もいましたし、 時代に教師修練を受けたときには少数ですが女性 れまで関係を築いてきました。しかし、私が学生 家の宗教として、 変わりません。檀家制度に支えられてきた寺は まだ家父長制の名残りは強く、男性上位の構造は ずにいます。ご門徒さんの家々においても、 寺社会は男性中心であることからなかなか変わ 女性の僧侶、 家の代表である男性を中心にこ 住職が存在するのは 1)

えます。むしろ逆に問題が起こらないような、私人のないます。今は一国一城の主のような住職のあり方にもない。今は一国一城の主のような住職のあり方にもす。今は一国一城の主のような住職のあり方にもす。今は一国一城の主のような住職のあり方にも

教が、 のか、 に目を背けてはなりません。 ちが聞いてきた仏教によって保たれてきたのでは るという問題がそこにはあります。そういう意味 ないかと思います。本来人間を解放するはずの仏 ところが大きいと思います。寺独特の空気は私た われているのは、教えをどう聞いてきたかに因る 聴聞しているのか。現在のように寺が閉鎖的と言 では様々な問題に信仰運動として向き合ってきた にお釈迦様や親鸞聖人、蓮如上人等の言葉を用い ることなく、他人を教え、自らを正当化するため るというべきかもしれません。私自身が教えられ にとって都合の良い教えとして仏教を利用してい 人間を縛る教えとして利用されてきた歴中 あるいは自分や社会の都合に合わせて仏法

だと思います。 ているのかを確かめ合う場が必要とされているの 問題解決ということではなく、どんな問題を抱え でしまうことが多いのではないかと感じました。 そのことを語り合う場もなく、一人で背負い込ん て、多くの人たちが同じような問題を抱えながら か分からないことばかりです。 は矛盾や納得のいかないこと、どうしたらいいの きたのではないかと思います。寺で生活する日常 などが飛び交う中、生きた言葉でカルタ作りがで すことができました。会議の中では赤裸々な告白 作されました。その制作に参加する中で、あらた て、女性室では「女と男のあいあうカルタ」が制 昨年、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を記念し て「あいあう」ことを考える貴重な時間を過ご カルタ作りを通し

2012年 会 場 京都·旅館「洛兆」

ました。参加者は二十二名で、うち十二名が初め ての参加でした。 女性住職の集いを開き、今回第二回の開催となり 女性が住職の任にあります。二〇一〇年に初めて でした。二〇一二年五月一日現在で、百十七名の のが、今から二十年前に実現した女性住職の誕生 女性の宗門活動への参画の大きな転機となった

子さんに住職を引き継ぎ、前住職として参加され がいないから心配だという意見がある一方で、息 と参加している様子でした。また跡継ぎ問題に関 り繰りしていく大変さや、男性住職の中でがんば た方は、嬉しい半面さみしいような複雑な思いが っている様子などが語られました。二回目の参加 周りに女性住職のいない孤独感、一人でお寺をや 一日目の全体座談では、初めての参加者から、 前回より気持ちに余裕が生まれ、ゆったり 住職を継いだけれども自分の後を継ぐ人

> 男性の坊守の問題にも話が及びました。 られました。「連れ合いの理解のもとで今回参加 の仕事もしているので大変だ」という方もあり、 できた」という人や、「一人で住職の仕事も坊守 がめぐまれていた」等、参加者同士の交流が深め を初めて知った」、「励みになった」、「自分の環境 あると語られました。「色々なケースがあること

を対象とした「婦人教化」団体は早い時期につく あるという問題が語られました。一方では、女性 られたという史実の延長線上に女性住職就任が 中、男性僧侶の「代務」として女性の得度が認め に女性の得度が認められなかったことや、戦時 委員より「真宗大谷派における女性の歴史」につ 眼をおき、また山内小夜子解放運動推進本部本部 いての講義を行い、学びを深めました。明治初期 いくことを願い、一人ひとりの声を聞くことに主 今回の集いは前回同様、点から線へつながって



話がありました。
話がありました。
話がありました。そして、「今ある組織や団体は女性なりました。そして、「今ある組織や団体は女性なりました。そして、「今ある組織や団体は女性が主体となって運営しているか」「主体が誰かを自覚していくことが大事なことではないか」との

二日目は、前日の講義を受けての感想も含め、
二日目は、前日の講義を受けての感想も含め、
全員がそれぞれの思いを語り合いました。「女性
住職の、女性、という言葉が必要でなくなること
を願う」、「教区の教化事業の場などでいつも『女
性としてどう思われますか?』と聞かれる」。声
明に関しては、「無理に声を低くして男性の声明
にあわせるのが辛い」という意見や、逆に「声を
つぶして男性のような声明をしている人をみか
ける」など様々な意見がありました。「威厳のあ
る住職像にとらわれる」、「男性に負けたくない」
等、率直な意見もありました。一方では、「同じ
目線で話し合える人がほしかったので、今回参加
してよかった」、「女性同士で本音が話せたのでほ
してよかった」、「女性同士で本音が話せたのでほ

る手立ても考えてほしいとの要望がありました。物団の中で、住職として悩みは尽きることがないの要望をいただき、更に代務者、有教師の方々への拡張、なかなか参加できない方々の声を聞きとの拡張、なかなか参加できない方々の声を聞きといただき、更に代務者、有教師の方々への拡張、なかなか参加できない方々の声を聞きといる手がありました。

参加者の声

生き方としての住職に向き合う

今回はじめて参加させていただきました。ならい悩みや課題を共有するのではなく、一人ひとりが向き合うべきことを再確認する会だったように思います。確かに女性特有の悩みはありますし、女性史の講義を通して、近年までの宗門における女性の姿の一端を知ることもできました。しかし、私はどこかでそれを逃げ道にしてはいないか、自分の職業、もっといえば生き方としての住職に向き合っているのかと問われたように感じました。

今回参加することは、もともとそれほど前向きではありませんでした。ことさらに女性といきではありませんでした。ことさらに女性といれほどでもなかったのですが…)。将来的に住職の道を考えている女性の希望者がいらっしゃ耽の道を考えている女性の希望者がいらっしゃれば、参加していただいてはどうでしょう。そういったことができるなら、知り合いを誘いやすくなりますので、女性住職も参加しやすくなると思います。

再会できた喜び

す。
落ちついた感じの集いになったかなと思いまて、大変貴重な時間を過ごせました。前回よりまた初めての方とも色々お話させていただいまに初めての方とも色である。

二年前に参加させていただいてから、自分自身変化があったように思います。何名かの方もおっしゃっていましたが、日々いっぱいいっぱいだったのが、少し肩の力をぬいて法務に励めるようになったと思います。今回も座談会や、各部屋に帰ってから日々不安に思っていることを部屋に帰ってから日々不安に思っていることで、後継者問題や寺院の維持について等)を話せて大変参考になりました。大谷派における女性で大変参考になりました。大谷派における女性で大変参考になりました。大谷派における女性で大変参考になりました。大谷派における女性で大変参考になりました。大谷派における女性で大変参考になりました。大谷派における女性で大変参考になります。



じる次第です。 分がありました。 ていけば良いのではないかと、 今回、 一人ひとりとのご縁を大切に歩みたいと感 皆様にお会いして、 またこういう集まりを期待して 自分なりの絵を描 その上で門徒

はこうあるべきという枠にとらわれていた部

身の中に、

住職とはこうあるべき、

女性住職と ただ自分自

や差別もなく今に至っております。

決心後は門徒さんや周囲の住職方の反対

ておりましたが、

女性の仲間に背中を押しても

おります。

大谷派僧侶の男女比

頑張らねばという思いを深めました。 て取り組んでいらっしゃるお姿に、

私は住職になることに自信がなく不安を感じ

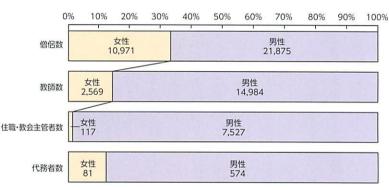
ことは難しかったのですが、

各々に自覚を持つ

私ももっと

限られた時間の中でしたので、

深くお話する



項目	男性		女性		合計	
僧侶数	21,875	66.6%	10,971	33.4%	32,846	
教師数	14,984	85.4%	2,569	14.6%	17,553	
住職·教会主管者数	7,527	98.5%	117	1.5%	7,644	
代務者数	574	87.6%	81	12.4%	655	

※2012年5月1日現在





- ○負けるもんか!と 肩に力が入っていた 自分を客観視できた。
- ○他宗の女性住職や 女性の位置などを 知りたい。
- ○同じ女性住職同士が 会うという事に心が ホッとした。 一人じゃないんだって 事をやっと感じられた。
- ○班別座談を設けるなど、 さらに本音を語れる ヾ場、をつくってほしい。
- ○女性の有教師の 方々の活動状況を 知りたい。
- ○自分は特別な事情があって住職になったと思って いたが、何も特別なのではないと思えるようになった。 みんなそれぞれの事情を抱えた中で、 それをまるごと受け入れてつとめておられ、 とても励みになった。
- ○「誰に聞いたらいいん だろう」等、日常的な悩み を解決し、凝り固まった 考えをほぐしてもらえる *場、となった。
 - ○僧侶(住職)の集い なのだから、 教えを基調とした 語り合いにつなげて いけるとよい。

Recommended BOOK & MOVIE

本と映画の紹介

女性室スタッフ 草野龍子

『新・仏教とジェンダー 女性たちの挑戦』

女性と仏教 東海・関東ネットワーク編 梨の木舎 定価2400円+税



海・関東ネットワーク」は、仏教教団に所属す る女性たちが1996年に立ち上げたもので、現 代の仏教界の在り方について、宗派や立場を超えて議 論や情報交換をするなどの学びの場を持ち、さまざま なかたちで発信しています。

ページを開いてまず注目したいのは、「ジェンダーイ コールな仏教をめざして」と題してネットワークが主催 したシンポジウムです。尼僧、チベット仏教、坊守、日 蓮宗女性教師など多様な立場からの発言があり、宗派 の違いを超えて見えてきた共通の課題などが語られて います。

その後のページでは各筆者が、経典についてや、寺 での生活から見えてきたこと、また仏教徒としての社 会的活動などをジェンダーという視点で具体的に語ら れていて、とても興味深い内容となっています。

今までのどこか固定化された発想にこだわらずに、 これからの寺院や教団の在り方を模索する上で、大き なヒントを示唆してくれています。

スタンドアップ』

監督:ニキ・カーロ 2005年/アメリカ映画



ネソタの過酷な鉱山労働を背景に物語が展開し ていきます。全米初のセクシャル・ハラスメント 裁判で勝訴した、実話に基づくお話です。

主人公の女性は、自分と2人の子どもを養うために、 鉱山の重労働につき男性と同じように働くことを選びま した。そんな中での敵意、脅迫、侮辱、凌辱と、あり とあらゆる方法で彼女にいやがらせをする鉱山の男た ち。ひどい状況に置かれ何度も倒れそうになる中、彼 女の屈せず立ち上がっていく姿は、見ている側に勇気 と生きるエネルギーを与えてくれます。

最後には一緒に拳をあげ立ち上がっていく気持ちに させてくれます。

区教化委員会の代表の方です。 場を設定しました。参加者は過 取り組みの紹介と、女性室が御 議会」を開催しました。今回の 教区および開催予定の教区の教 去に女性室公開講座を開催した ある課題を確認する話し合いの 遠忌の記念として製作した「女 協議会は、二〇一〇年に女性室 両性で形づくる教団をめざす協 て、女性と男性の関係の根底に と男のあいあうカルタ」を通し 公開講座が行われた長浜教区の 二〇一一年十月四日、 「男女

2011 る をめざ

1 長浜教区の活動報告

いを交えて表現されたものです。 によって縛られている現実を、笑 た。寸劇は女性と男性が因習など の映像を今回みんなで視聴しまし た。その後、教区で編集した寸劇 の方々が寸劇を企画し実演しまし する試みとして、教区の実行委員 紹介が行われました。公開講座に 行った長浜教区から、取り組みの 参加された方々に分かり易く提起 二〇一〇年に女性室公開講座を

佐藤義成 陵木法子

3 全体協議

した。 要という意見や、委員会 組みを具体化する上で について意見が出されま が立ち上がってからの継 教団のバックアップが必 みました。教区での取り 続的な取り組みの困難さ しながら全体協議会が進 各教区から課題を提起

した。

方法などの情報交換が行われま 教区の動向やカルタを使用する どのように取り組むべきか、他 り、参加者は任期中の三年間を 任期の初年度ということもあ 委員会改選の時期で、三年間の

昨年六月は、各教区とも教化



2 「女と男のあいあうカルタ」取り

欲しいとの声があがりました。 した。参加者からは、このカルタをもっと全国に広げて つカルタの言葉を確かめながら、話し合いの場を持ちま 持ちでカルタを楽しみました。その後、班ごとに一句ず カルタ」を各班にわけて行いました。参加者は真剣な面 昼食を挟んで、女性室が作成した「女と男のあいあう



各教区からの意見

〈教化委員会での取り組み〉

- ●委員会のメンバーが入れ替わって、どのように取り組んでいけば良いのか。
- ●委員会は立ち上がっているが、性差別について無関心な人が多く、スタッフ が足りない。
- ■課題を継続するために委員会は残しているが、取り組みは停滞している。
- ●「差別問題の中の一つ」という扱われ方になっていて、スポットが当たらなく なっている気がする。
- ●男性に聞いてもらう講座を開催している。
- 女性が教化の現場に入っていけるよう取り組んでいる。
- ●教区坊守会と連携して取り組んでいるケースや、独自に行っているケース もある。

〈女性室との連携について〉

- ●取り組みのマニュアルを女性室から提示してほしい。
- ●毎年、協議会を開いてほしい。他教区の意見を聞くことで、取り組みの活力 となる。
- 教区での積極的な取り組みにつなげるには、女性室との連携が必要。

〈ジェンダーカルタについて〉

- ●寺での生活や問題を語り合いながら、カルタを教区独自で作成した(日豊・ 久留米・大阪)。
- ●性差別の問題を楽しく取り組むことで、人と人とのつながりができると思う。
- ●カルタは有効だと思うが、どんな場で活用すればよいのか。
- ●なごやかな雰囲気づくりにはカルタは有効。

〈その他〉

- ●世代間によって性差別の意識が違う。若い世代では家事・育児に積極的に 協力している人が多く、問題が見えにくくなっている。
- どういうことがセクハラなのかわからない。



度上は ことだと感じました。 の生活の中から問題を明らかに 画するなど、私たち一人ひとり 足してしまいがちです。 て取り組むべきか迷ってしまい それを避けてしまう傾向が えにくくなり、声を出しにくく その結果、 様に開かれてきました。しかし、 なってきているように感じ 相違 ルタを使用したり、 あって、 取り組めばよいという雰囲気 あるがゆえに、自覚しにくく 提起していくことが大切な 積極的な取り組みに繋げる 性差別の問題は自らの問題 様々なアプローチとして 各教区でも特定の人だけ また、 から、 かなりの部分で男性と同 の宗門活動につい かえって性差別が見 関わるスタッ 世代間による感覚 どこに焦点を絞 寸劇を企 その中 つが不 て、

参加教区

奥羽教区 山形教区 三条教区 高田教区 富山教区 能登教区 金沢教区 小松教区 福井教区 高山教区 名古屋教区 長浜教区 大阪教区 山陽教区 四国教区 日豊教区 久留米教区 鹿児島教区 (以上18教区)

女のささやき





佐々木るり 仙島を生きる

てもなく逃げ出したのは、雪の降れは原発から五〇キロほどの場所にある自坊を横切りました。瞬間、「死」という言葉が脳裏知りました。瞬間、「死」という言葉が脳裏を横切りました。その晩、寺に避難してきて知りました。瞬間、「死」という言葉が脳裏を横切りました。その晩、寺に避難してきていた数家族、十数人で一台のワゴン車に乗りいた数家族、十数人で一台のワゴン車に乗りいた数家族、十数人で一台のワゴン車に乗りいた数家族、十数人で一台のワゴン車に乗りいた数家族、十数人で一台のワゴン車に乗りいた。かき集めたガソリンは車一台分しかなく、逃げられるのは女性と子どものみ。運転手以外の男性はみな寺に残りました。家族離れ離れで二度と会えなくなるのではないかなれ離れで二度と会えなくなるのではないかと不安に感じながらも、互いの無事を祈らずと不安に感じながらも、互いの無事を祈らずにはいられませんでした。

私は赤ん坊を抱き、座席の上に体育座りのような恰好で座りました。その足元には中学生の女の子がやはり同じような恰好でうずくまっていました。身動きもできない車の中で口をひらく人間はいませんでした。ガソリンが尽きるまでの逃避行。行くあてもなく、一続で受け入れてくださるとの知らせを受け、不安なままの一夜を過ごしました。明け方、精帯電話に一本の連絡が入り、新潟の三条別院で受け入れてくださるとの知らせを受け、一同ようやく胸をなで下ろしました。別院では笑顔で職員の方が私たちの到着を待ってはていてくれました。その笑顔にどれほど勇気づいてくれました。その笑顔にどれほど勇気づいてくれました。その笑顔にどれほど勇気づいてくれました。その笑顔にどれほど勇気づいてくれました。

顔が何よりの救いでした。と、目が離せない原発の状態に神経をすり減と、目が離せない原発の状態に神経をすり減けられたことか。日に何度もくる大きな余震

だまだ避難できない子どもたちが大勢いま うに朗らかに子育てを楽しむわけにもいか 戻したい、私の切なる願いです。 す。愛する故郷「福島」でのんびりと暮らし、 ものに思えてきます。それでも、福島にはま の姿に「のびのび」などという言葉は程遠い ないのが事実です。マスクをして通う子ども 命取りというぎりぎりの状況の中、以前のよ ばく検査」が必要不可欠です。手を抜いたら ない場所への定期的避難」、「継続的な内部被 は、「除染」、「食品の放射能測定」、「汚染の 島で暮らす子どもを被ばくから守るために に生きる子どもたちの笑顔をもう一度取り いのちを紡いできた人々の幸せ、そして福島 い放射能との戦いはいまだ続いています。福 前とは一変しました。いつ終わるともしれな その後福島に戻りましたが、暮らしは震災

私は実感しました。

私は実感しました。

本は、宗教や、人種や、職業や、そういった。
は一切気にならなくなるものだと今、感じています。みなまったく平等な尊い尊い「いのち」をいただいて今を生きていたのだと今、感

日本大震災から1年。走りっぱなしであっという間の1年だった。仙台教区仏教青年会では、昨年の3月下旬から被災地に入り活動を続けてきた。その中で様々な人との出会いがあった。時には笑い、時には泣き、辛い思いもしたけれどその人たちとの出会いが自分自身の原動力でもあった。

昨年の9月11日だったと思う。妻と2人で被災地にお話を伺いに行ったことがある。その帰りの車中での会話であった。「どうしてボランティアに行っているの」と唐突に質問された。とっさに「被災地で待っている人がいるからかな」と答えた。半分ホントで半分ウソの様な答えをしてしまった。動機はそれだけではなかったが、その時はその言葉が思わず出てきた。さらに妻に「家では〇〇(息子の名前)が待っているよ」と言われた。ぐうの音も出なかった。

震災以降、その惨状を見て「自分にも何かできないか」という思いだけで行動してきた。 何が正しくて何が間違いなのかは分からないけど、何かせずにはいられなかった。そんな中、 自分が家を空けることが多くなったが、その 穴は家族が支えてくれた。法務のことだった り、家事や育児のことだったり、本来自分が するべきことも代わりにやってくれた。その様 な支えがあるおかげで今まで活動できてきた。

被災地で自分を待ってくれている人たちと家で待ってくれている家族。そういう狭間で様々な葛藤や矛盾を抱えたまま動いてきた。たまに「ボランティアがんばっているね」とか「偉いね」なんて言われるけど、むしろ家族の方が自分よりはるかにがんばっている。申し訳ない気持ちで一杯だ。

仏青仲間に「2歳児の息子に10年後震災の事を話すならば何を話したいか」という質問をされたことがある。「あの時は寂しい思いをさせてごめんね」と謝ろうと思っている。いつも家を出る時、泣きながら息子が見送ってくれる。まだ言葉はしゃべれないから涙で寂しさを表現してくれているのだろう。自分がしていることが正しいのかは分からない。だけど家族が応援してくれている限り続けていけたらと思っている。次もまた、葛藤と矛盾を抱えながら被災地に赴くことになるのだろう。



家族に支えられて

久保田信立 仙台教区 炒頓寺

エッセイ Sinryu Kubota Sinryu Kubota

女性室広報誌『メンズあいあう』第6号 発 行 2012年7月31日

発行人 林治 発行所 真宗大谷派宗務所

解放運動推進本部女性室

〒600-8505 京都市下京区烏丸通七条上る常葉町

TEL 075:371:9247 FAX 075:371:9224

ます

なぜ『メンズあ li あう」なのか

the origin

堕落させた」という全国水平社創立宣言の言葉があ うことを願って広報誌 になってきました。 女性に対する差別に、 私たちの教団では、 「人間を勦るかの如き運 女性室は、 つながりを回復し男と女とがともに生きあ 長い歴史の中で創り出されてきた 近年ようやく光が当てられるよう 「あいあう」 運動は、 かえって多くの兄弟 を発行しています。

女性室活動報告

【スタッフ派遣】

場を開きたいという願いから『メンズあいあう』を刊行

〈2012年〉1月20日 高田教区「男女平等参画を考える会」

きないのではないでしょうか。

性差別の問題は、

女性の問題であると同時に男性の

です。

その視点に立って、

男性の側からも積極的にこ

問題を考え、

肩の力を抜いて

「男とは?」を語り合う

1月24日 「女性と仏教・東海ネットワーク」例会

加害者として頭を垂れるのではなく、

男性である私もま

一人であり

男たちはただ

性差別を訴える女性たちの前に、

た性差別という仕組みの中に組み込まれた

「男らしさ」

という束縛から解放されることがなけ

n

男と女とが

「御同朋」

として水平に出会うことはで

らが問われていることに気づけと。

男性社会に融和させていくことではない、

女性をどう処遇するかではなく、

男として生きる自 ということで ということは、

男性がその正義感をもって女性を勦り、

ここから教えられることは、

性差別の問題に取り

1月27日 公開講座大阪会場 事前スタッフ会

2月6日 公開講座大阪会場 事前スタッフ会

3月9日 公開講座大阪会場 事前スタッフ会 3月18日 メンズカウンセリング協会 認証研修会

3月26日 公開講座大阪会場 事前スタッフ会

4月25日 公開講座大阪会場 事前スタッフ会

5月11日 公開講座大垣会場 事前スタッフ会

5月16日 高田教区「男女平等参画を考える会」

5月17日 公開講座大阪会場 事前スタッフ会

5月25日 公開講座大阪会場 事前スタッフ会

【第2回女性住職の集い】

2月1日~2日

会場:京都・旅館「洛兆」

参加者:22名

【第12回女性会議】

5月22日~23日

会場: 真宗本廟研修道場

テーマ:「真宗と人権 一なにが受け継がれてきたのか、

なにを受け継いでいくのか―」

参加者:27名

【公開講座】

5月31日 大垣会場

会場: 大垣教区同朋会館 講師:園田久子さん

テーマ: 「女性史に学ぶ~性愛の歴史をつむいで~」

6月23日 大阪会場

会場:大阪教区教化センター

講師: 村瀬ひろみさん

テーマ:「アニメがうつしだす女像・男像」



◆早朝、小5の長女が妻に叱られ、半べそをかきつつ、私の布団にもぐりこんできた。背中を ぽんぽんと叩きながら「だいじょうぶ、だいじょうぶ」となだめる。実は夫婦間の約束があり、 どちらかが子どもを叱った場合、片方は全身で抱擁し、受けとめることになっている。そうする ことで「過ちは良くないこと」と、「何があっても愛され、受けとめられ、尊重される自信」を 育くんでいきたいからである。半面、両親で同調して叱りつけ続けると、子どもは自分の失敗 を許せなくなる傾向があるのではないかと思っている。

「地震、雷、火事、おやじ」という言葉がある。かつて父親とは怖く、理不尽で、時として 子どもの眼前で妻に手をあげることすら辞さない存在として、母親は対称的に無条件の愛、献 身、受身など聖母像のように語られてきた。しかし、母親たちも感情に翻弄されることもある だろうし、父親たちもまた両手を広げて子どもを愛したかったのだろうなあと、長女の涙を頬に 感じながら思う。

「地震、雷、火事、おやじ」の「親父」とは、もとは「おおやじ」、それは「台風」を意味していた。 恐ろしい存在が父親に置き換えられてきた歴史に思いを馳せる。(土屋慶史)